漢文化圏のためのビジュアルデザインとメカニックデザインによる世界観の表現

魏 魯陽　Wei Luyang

研究背景

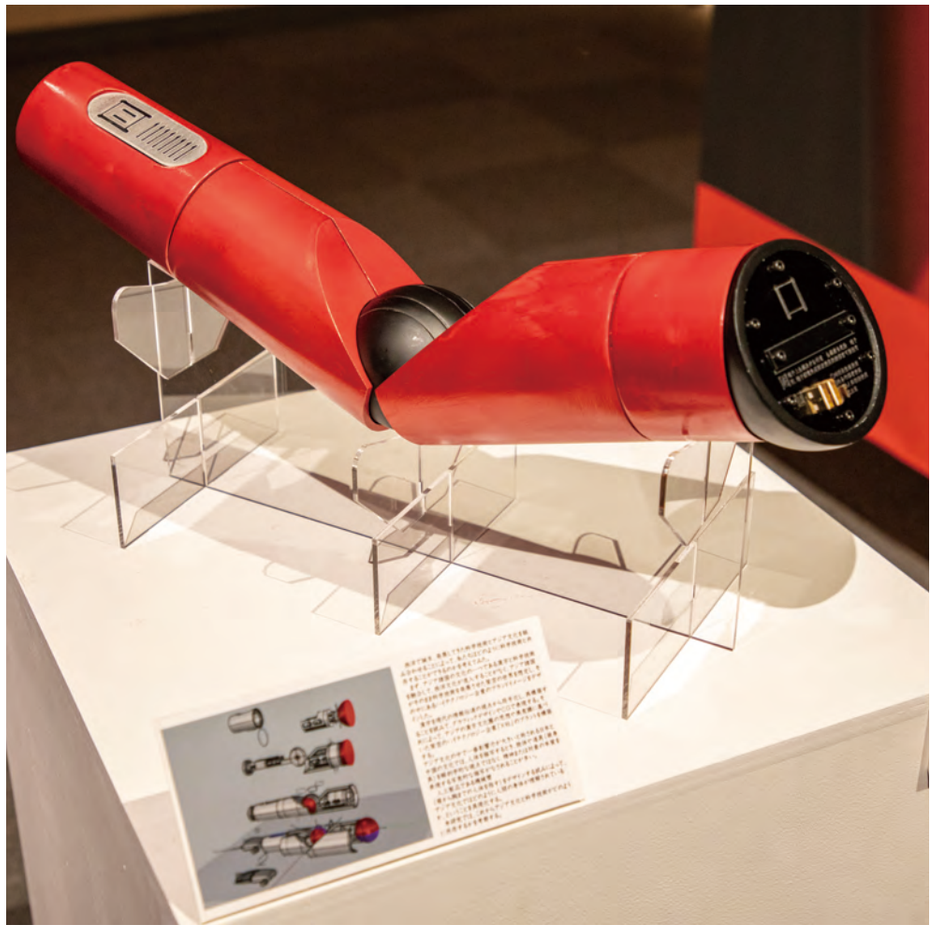
本研究では、西洋文化の影響をうけておらず、独自に技術と文化を発展させた架空の近未来アジア社会を想定し、その世界において使われるであろう製品のモックアップを中心とする展示を行う。これは実際には存在しない、架空の世界における架空の製品を我々の住む現実世界で実体化する試みによって、これから発展しつつある技術社会の中でアジア文化がどのように存在していくかを考察し、提案するものである。人と文化と技術の関係を模索するにあたり、アイコンなどのビジュアルデザインと、それを応用するための立体造形を行う。それに表示される機能を示すアイコンなどは、漢字を元にした独自のアイコンに置き換えた。提示する世界観は現実の欧米文化と歴史によってもたらされた影響を除外し、仮想のアジア文化の考え方をビジュアル化し、入れ替えて再構築する。再構築した仮想のアジア文化圏についての情報や物語を様々な媒体によって多角的な表現につなげていくものである。

できるだけ多くの人へメッセージを届けるユニバーサルデザインも存在するが、本研究では漢字文化圏を対象とした。これは東洋を舞台とする架空世界を表現するためである。未来社会を描いた作品の多くは西洋文化に基づくものが多いが、東洋を舞台とする作品も幾つか存在する。

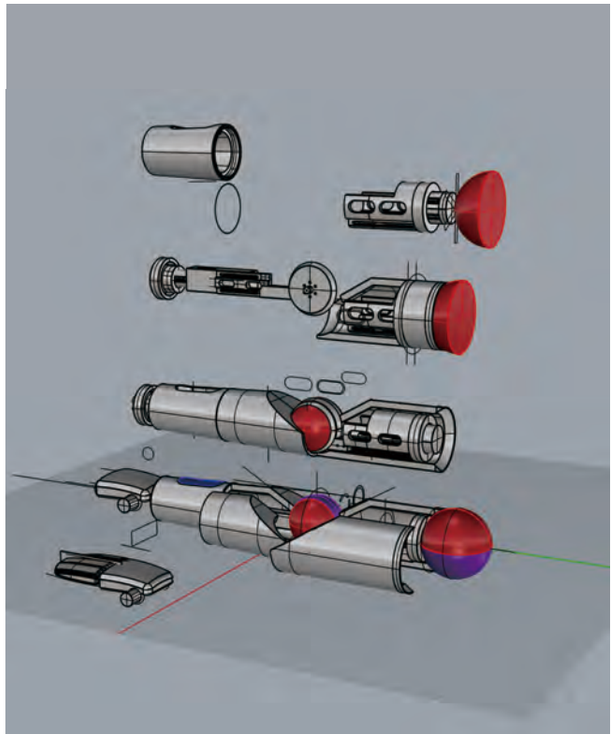
本研究で用いる架空の世界では、東西文化の交流が困難な状況と想定した。結果として、アジア諸国は西洋文化の影響を受けることなく、独自にその文化を発展させているものとする。そこでは、漢字を基とする独自の美意識が形成されており、様々な領域に影響を与えている。そもそも、漢字は象形情報を表すものであり、その多くはシンボライズされたアイコンそのものである。今回想定した世界でも、情報爆発は発生しており、そのため情報量を多く含む漢字を用いて効率的な情報伝達の仕組みが模索されている状況を想定した。

漢字文化圏の人々を対象として、漢字という共通基盤はあるもののそれぞれの文化において漢字をして指される集合は同一ではないものとした。このような想定の下、最大公約数としての漢字を軸に対象とする文化圏の人々に理解される表現を試みる。

既に述べたとおり、今回はモックアップによる機械臂展示となったが、実可動する機械臂の実現についても模索して行きたい。また、アイコンのデザインにおいては、曲面への印字も考慮したデザインを行っているが、印刷設備の問題もあり、本作品では曲面上の印字は断念せざるを得なかった。ビジュアルデザインとメカニックデザインを並行して行ってはいるが、これら２つを横断するデザイン思想の存在が必要であると感じた。これらについては今後の課題としたい。



2013年浙江科技学院大学アート学院視覚伝達専攻卒業。大学でビジュアルデザインを学んだのち、グラフィックデザイナーとしてデザイン会社に勤務。大学院では、日中文化と科学技術の関係性について研究を進め、「漢字文化圏のためのビジュアルデザインとメカニックデザインによる世界観の表現」をテーマとして新たな表現手法の可能性を追究した。日本や中国などアジア諸国の伝統文化が今後どのようにテクノロジーと共存していくのか、活動を通してさらに考察していきたいと考えている。



「チョップスティックス、モバイルフォン&ロボット」
2020 年
立体、映像
フィラメント、樹脂、紙
W:2000 × H:2000 × D:6000mm